



실리콘밸리 AI 영화페스티벌 코리아 2026
Silicon Valley AI Film Festival Korea 2026



글로벌 AI IDOL 어워드 2026 · 사전 쇼케이스
Global AI IDOL Award 2026 · Showcase

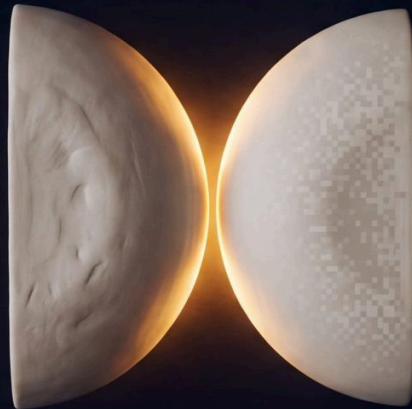
SVAIFF KOREA 2026 プレスリリースシリーズ ③ テーマと哲学 2026.10.24

ふたつの半分、ひとつの月 — 手で作った半分と、 AIが満たす半分が出会う場所

- SVAIFF KOREA 2026、利川の陶磁器名匠 Rae-heon Park とメディアアーティスト Young-hoon Jeong を特別招待作家に
- 人類最初のスクリーンであり最初のアイドルだった「月」、上下ふたつの半分をつないでつくる「月壺」をテーマに
- この思いに共感したJI LIN共同組織委員長の後援により、応募・観覧ともに無料の公益型イベント

AIが映像や音楽、公演といった文化コンテンツの領域に急速に広がっている。
数行の文章で絵が描かれ、
数回のクリックで映画のワンシーンができあがる時代だ。
しかし道具が速くなるほど、重くなる問いがある。この道具で何を、
なぜ見せるのか。AIを芸術や文化、哲学を表現する道具として扱うには、
何が必要なのか。

12月17日にソウル三成洞の Gabin Art Hall で同時開催される『SVAIFF KOREA 2026』
(シリコンバレーAI映画祭코리아2026) と『グローバルAI IDOLアワード2026』は、
この問いに答えるため「ふたつの半分、ひとつの月」というテーマを掲げた。そして利川市の陶磁器名匠
Wonjeong Rae-heon Park と、韓国第一世代のメディアアーティスト Young-hoon Jeong
を特別招待作家に迎えた。土と火で伝統を受け継いできた手と、
スクリーンとコードで未来を探ってきた目を同じ舞台に立たせ、伝統と未来がどう出会い、
何をしていくべきかを考えはじめようという試みだ。



ふたつの半分が触れ合って輝く月壺——イベントのテーマ「ふたつの半分、ひとつの月」

SVAIFF KOREA 2026 組織委員会・AI生成画像

1. 月、人類最初のスクリーン

テーマの出発点は月だ。

はるか昔、夜空に浮かぶ明るい月を見上げた人々は、そこにウサギと桂の木を描き込んだ。ある人は餅をつくウサギを見、ある人は恋しい顔を見た。月そのものは何も語らなかったが、人々はそれぞれの想像をその丸い面に映した。そう考えると、月は人類が初めて一緒に眺めた画面、つまり人類最初のスクリーンだったのかもしれない。



火を囲み、同じ月を見上げる人々——人類最初のスクリーン

SVAIFF KOREA 2026 組織委員会・AI生成画像

火を囲んで同じ月を見上げながら語り合った夜から、洞窟の壁に描いた絵、灯りの前の影絵、映画館のスクリーン、居間のテレビまで。画面は変わり続けてきた。そしていま、AIという最大の転換点が私たちの前に来ている。



月→洞窟壁画→影絵→映画→テレビ→AI、画面の長い歴史

SVAIFF KOREA 2026 組織委員会・AI生成画像

2. 月、人類最初のアイドル

月はまた、人類最初のアイドルでもあった。「アイドル」という言葉のもとにある「偶像」、すなわち皆がともに仰ぎ見る対象という意味においてだ。

小正月の満月には人々が同じ月に願いをかけ、秋夕の満月の下では手をつないで円舞「カンガンスルレ」を踊りながら、一年の実りと家族の幸せを祈った。離れて暮らす人々も、同じ月を見ながら同じ思いを分かち合った。



月の下で手をつないで踊る人々——人類最初のアイドル

SVAIFF KOREA 2026 組織委員会・AI生成画像

同じ日に開かれるグローバルAI IDOLアワード2026が映画祭と並び立つ理由もここにある。

AIから生まれる新しいアイドルとは、結局のところ、人々がともに見つめ、心を寄せる対象を新しいかたちで描くことだ。イベントは、月を見上げて願いをかけ、幸せを祈ったその古い物語を、韓国の伝統芸術である月壺へとつなぐ。

3. ふたつの半分を手でつないでつくる月壺

月壺は、その名のとおり満月に似た朝鮮時代の白磁の壺だ。ところがこの丸い壺には、あまり知られていない秘密がある。大きさに加え、その形の構造上の理由から、ろくろの上で一度に挽き上げることができないのだ。

陶工はまず上半分と下半分を別々に挽く。そして程よく乾いたところで、ふたつの半分の人の手でつなぎ合わせる。ろくろの回転だけでは決して完成できない瞬間であり、

継ぎ目を整え、
丸い線を正すのは手だけの仕事だ。
だから月壺は完璧な円ではない。
少しずつ傾き、
少しずつずれたその丸い胴に、
ふたつの半分をつないだ人の手の跡がそ
のまま残る。

この過程は、
手でつくってきた文化がAIと出会い、
新しいひとつへとつながっていく今日の
姿に似ている。片方は人の手、
片方はAI。
どちらか一方だけでは丸い月にならない
。ふたつの半分か触れ合う継ぎ目に、



ろくろの前で土を扱う名匠の手
作家提供



Wonjeong Rae-heon Park 名匠の月壺二点
作家提供

新しい月が昇る。
主催者が月と月壺をテーマに選んだ理由
であり、
この映画祭がクリエイターに投げかける
問いだ。
AIという半分を手にしたあなたは、
残りの半分に何を込めるのか。



Rae-heon Park 名匠の白磁の月壺
作家提供

4. 伝統の手——Wonjeong Rae-heon Park 名匠

Wonjeong Rae-heon Park 名匠は1996年に伝承工芸大展で大統領賞を受け、2016年に利川市の陶磁器名匠に指定された。ユネスコ創造都市（クラフト＆フォークアート）の利川は、数十年の経歴をもつ少数の職人だけを陶磁器名匠に指定している。彼はロンドンの工芸展 Collect に5年連続で出品し、韓国陶磁の美しさを海外に伝えてきた。

絵画を専攻した彼は、大きな壺の上にじかに絵を描き、彫る作品で知られている。

土と火を扱う手が筆を執り、壺という丸い画面の上に物語を描く。

伝統の形の上に自らの絵をのせる彼の仕事は、

古い器がそのままひとつの画面になりうることを示している。



Wonjeong Pottery Studio
入口の利川市陶磁器名匠の標識
作家提供

Wonjeong Rae-heon Park 名匠 (Wonjeong Pottery Studio、2026年10月)
作家提供



Wonjeong Pottery Studio
の工房に並ぶ壺
作家提供



壺の上にじかに描き、
彫った文様
作家提供



Kiaf SEOUL 特別展「粉青」
展示風景 (2022)
作家提供



月壺に絵を描く
Wonjeong Rae-heon Park
名匠——
AIで演出した場面
SVAIFF KOREA 2026
組織委員会・
AIで演出した場面
(作家の同意あり)

5. 先端の目——メディアアーティスト Young-hoon Jeong

Young-hoon Jeong

は弘益大学で彫刻を専攻したのち、30年以上にわたって技術と芸術を結びつけてきた韓国第一世代のメディアアーティストであり、メディア彫刻家だ。

ナムジュン・

パイク以後の韓国メディアアートの流れを受け継いできた作家として、

光州ビエンナーレ（2000）、

メディアシティ・ソウル（2002）、

オーストリア・リンツのアルス・

エレクトロニカ（2008）、

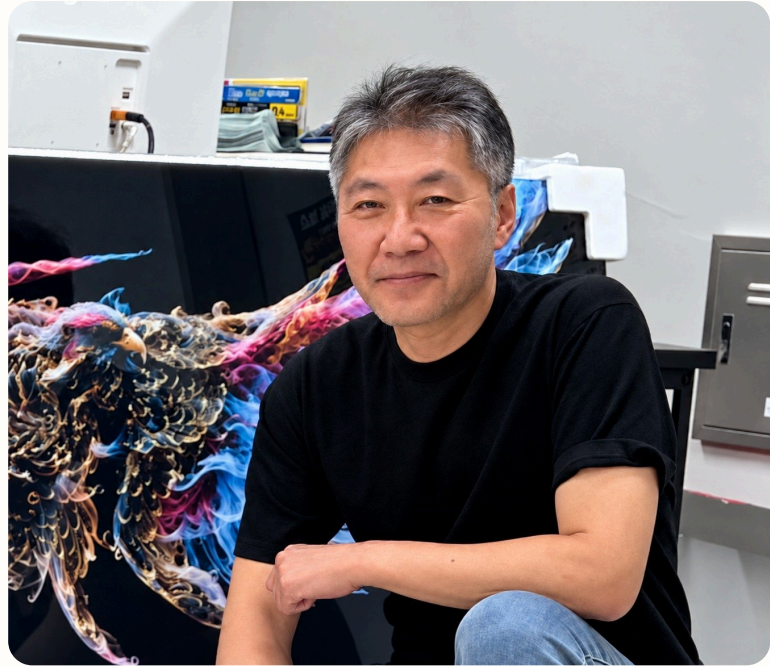
ソウル国際メディアアート・

ビエンナーレ（2008）、モナコ・

グリマルディ・フォーラムの Art Monaco（2013）などで作品を発表した。

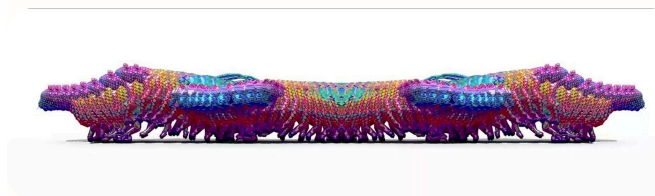
観客が仮想の虎と対峙するインタラクティブ連作『部分空間』は、

韓国の高校の美術教科書に掲載されている。



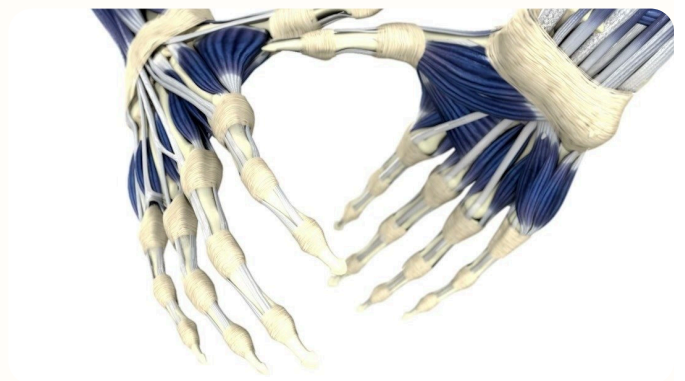
メディアアーティスト Young-hoon Jeong

作家提供



『部分空間——タイゴン（The Partial Space - TIGON）』映像の一場面

作家提供



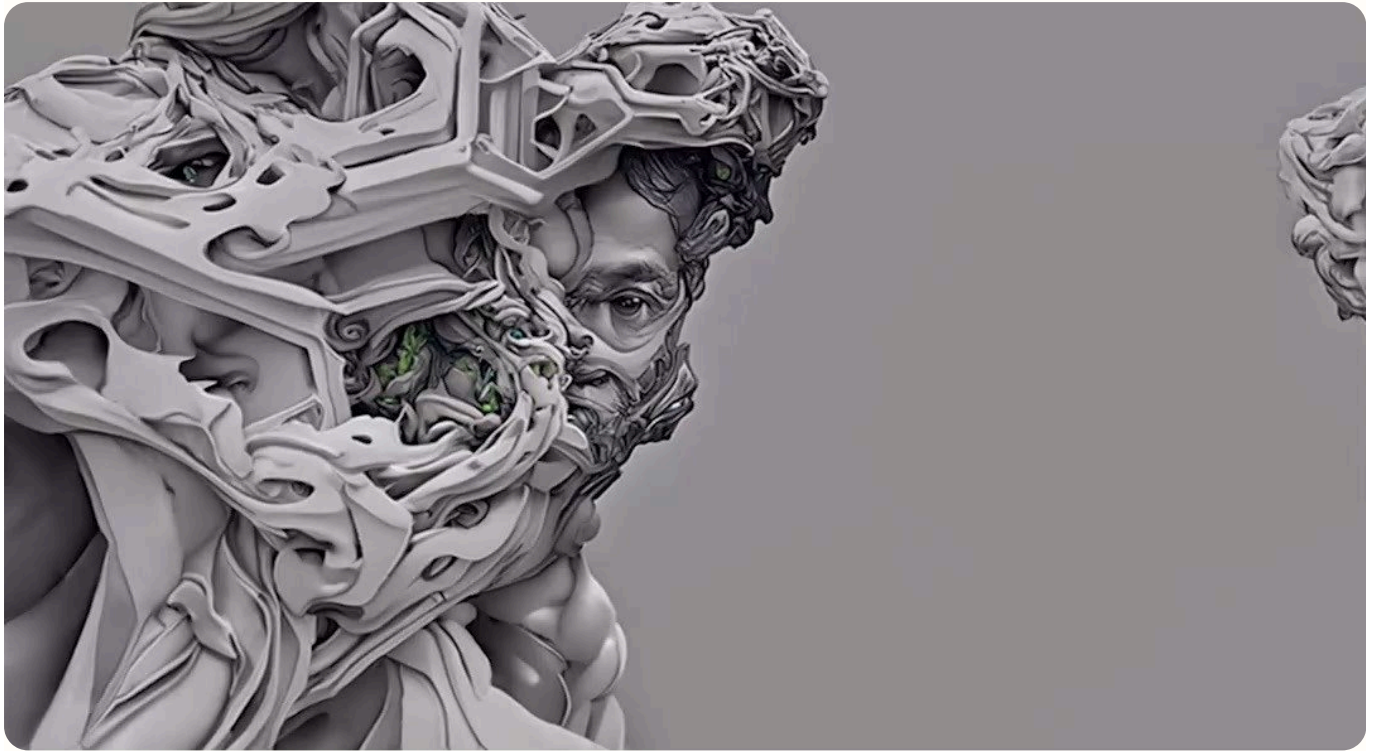
『匿名の叙事詩（Anonymous Epic）』映像の一場面
（2008）

作家提供

『飲み込まれた彫刻』、転換点に立つ芸術を問う

今回とくに注目したい作品が、3Dメディア彫刻映像『飲み込まれた彫刻（Swallowed Sculpture）』だ。画面の中で、古典彫刻の顔と筋肉が見慣れない有機的な構造の中へ飲み込まれ、ふたたび姿を現す。彫刻家の手から生まれた形がデジタルの構造の中へ吸い込まれていく場面は、

手の芸術とデジタル文化がかみ合う転換点で、芸術が何を守り、何を新たに得るべきかを鮮やかに問いかける。



『飲み込まれた彫刻 (Swallowed Sculpture)』映像の一場面——3Dメディア彫刻
作家提供

作家は2022年の個展図録『from NFT ART to MATTER』で、
仮想と現実の境界を行き来する時代に芸術はどこへ向かうべきかを問うた。そして、
作品をデジタルへ移す過程（デジタルライジング）から出発し、ふたたび「物性」
という芸術固有の存在感へと戻ってくる転換（turn over）を語った。デジタルに飲み込まれ、
ふたたび形となって浮かび上がる『飲み込まれた彫刻』は、
まさにその転換の瞬間を目の前に見せる作品だ。



Young-hoon Jeong 個展図録『from NFT ART to MATTER』

作家提供

デジタルからふたたび土へ——『メディテーション・アート・護身菩薩』

最近作『メディテーション・アート・護身菩薩』は、この考えをさらに一歩進める。

半跏思惟像の微笑みから生まれたデジタルの菩薩が、線と光となって散り、ふたたび集まる。

作家はこのデジタル画像を磁器の板に陶磁器の絵の具で焼き付け、デジタルから生まれた形を、永く残る土の物性へと戻した。この作品は2024 World Art Expo（COEX）に出品された。



『メディテーション・アート・護身菩薩』——
半跏思惟像の微笑みから生まれたデジタルの菩薩
作家提供



『護身菩薩』——磁器に焼き付けたデジタルの菩薩
作家提供

土で月をつくる名匠と、デジタルをふたたび土に焼き付けるメディアアーティスト。
ふたりが同じ舞台に立つのは偶然ではない。ひとは手から出発して画面と出会い、
もうひとは画面から出発して手の物性へと戻ってくる。ふたつの半分が向かい合っているのだ。



Young-hoon Jeong——AIで演出した場面
SVAIFF KOREA 2026 組織委員会・AIで演出した場面（作家の同意あり）

6. すべての応募者に投げかける問い

ふたりの作家はイベント当日、第1部のカンファレンスに登壇し、それぞれの芸術観を語る予定だ。応募者がどんな作品をつくるにせよ、伝統と技術のあいだでクリエイターは何をつかむべきか、一度考えてみるきっかけにしたいという思いからだ。Young-hoon Jeong の映像作品の全編は、イベント当日に授賞式会場で上映する。

この問いは映画祭の審査方式ともつながっている。今回の映画祭は完成作（75点）とともに創作過程（25点）を審査する。AIがつくった結果ではなく、その結果を引き出した人の意図と悩み、失敗と修正、そして本人の役割を見る。ふたつの半分のうち、人の半分の評価をするということだ。

7. 後輩への贈り物、ミニチュア月壺

懸命に取り組む後輩クリエイターのために、Rae-heon Park 名匠がみずから挽いたミニチュアの月壺も一部の受賞者に贈られる予定だ。手でふたつの半分をつないでつくった月をひとつ、AIで新しい物語を書くクリエイターの手に渡すということだ。協賛は Wonjeong Pottery Studio の陶磁器名匠 Rae-heon Park と作家 Young-hoon Jeong がともに担う。

8. 同じ思いで加わった後援

この思いに共感したJI LIN共同組織委員長は、イベントの後援者としても名乗りを上げた。文化コンテンツを育て、のちの産業が育つ土台を広げようというイベントの趣旨に、その後援が力を添えた。

そのおかげで SVAIFF KOREA 2026 は、参加費、有料席、物品販売のない公益型イベントとして行われる。応募と観覧はいずれも無料で、客席は招待者を優先して配席し、残りの席は無料の事前登録で受け付ける。賞金を受ける受賞作19本については米国シリコンバレーのグローバル決勝の審査料（1作品99ドル）まで主催者側が負担し、クリエイターは費用を気にせず作品だけに集中できる。



金色の継ぎ目のある月壺——継ぎ目こそが私たちの舞台
SVAIFF KOREA 2026 組織委員会・AI生成画像

9. 継ぎ目こそが舞台

どんな世界が来ても、芸術の道筋を定めるのは人だ。人工知能を超える技術が訪れたとしても、芸術の進む方向は機械ではなく、人の深い思索の中からみずから見いださなければならない。「ふたつの半分、ひとつの月」は、その決意を込めたテーマだ。人の手とAIが触れ合う継ぎ目——そこが今年の SVAIFF KOREA 2026 の舞台である。

賞金総額は3,000万ウォン、グランプリ賞金は1,000万ウォンで、韓国大会の受賞作50本は2027年1月のシリコンバレー・グローバル決勝に進出し、国際舞台へとつながる（賞金受賞19本は決勝の審査料を主催者側が負担、決勝進出奨励賞31本は自己負担）。同じ日に開かれるグローバルAI IDOLアワード2026は2027年の本格開催に先立つプレショーケースで、Best AI Idol 1名に賞金350万ウォンを授与する。応募は10月25日から11月25日まで公式ウェブサイト (korea.svaiff.com) で受け付ける。

ひと目でわかる概要

イベント名	SVAIFF KOREA 2026・グローバルAI IDOLアワード2026
テーマ	ふたつの半分、ひとつの月
特別招待作家	Wonjeong Rae-heon Park 名匠（利川市陶磁器名匠）・ メディアアーティスト Young-hoon Jeong
開催日時	2026年12月17日（木）13:30～19:30
会場	ソウル江南区三成洞 Gabin Art Hall
参加費	なしー 応募・観覧無料（公益型イベント）
応募期間	2026年10月25日～11月25日
主催	E-Park AI株式会社、韓国AIマーケティング研究所
共同主管	シリコンバレーAI映画祭コリア組織委員会、MBIG株式会社
協賛	Wonjeong Pottery Studio 陶磁器名匠 Rae-heon Park、作家 Young-hoon Jeong
公式ウェブサイト	korea.svaiff.com
取材のお問い合わせ	SVAIFF KOREA 2026 事務局・ help@svaiffkorea.com

- #SVAIFFKOREA2026
- #グローバルAIIDOLアワード2026
- #ふたつの半分ひとつの月
- #月壺
- #RaeheonPark
- #WonjeongPotteryStudio
- #YounghoonJeong
- #メディアアート
- #飲み込まれた彫刻
- #AI映画祭
- #AIと芸術
- #公益型イベント
- #GabinArtHall

取材のお問い合わせ SVAIFF KOREA 2026 事務局・メール：help@svaiffkorea.com
SVAIFF KOREA 2026・korea.svaiff.com